

# 協働で取組む交流人口の増加に向けたまちおこし

平成23年度4月現在で、原子力・火力・水力発電所が立地する電源地域は全国で701市町村。今回はこの「電気のふるさと」で交流人口の増加などの取組みに奮闘する、行政と民間事業者の皆さんの話題を紹介する。



## 男 鹿半島・大潟地区が日本ジオパークに認定！

秋田県男鹿市

ジオパークとは、世界遺産と比較されるが、地質に関する優れた自然遺産を保全するだけでなく、それらを教育や観光（ジオツーリズム）に積極的に活用し、地域の活性化を図ろうとする点に違いがある。ユネスコの支援により「世界ジオパークネットワーク（GGN）」が設立されているが、国内では20地域のジオパークが「日本ジオパークネットワーク（JGN）」を結成して活動をしている。秋田県の男鹿市と大潟村が、このほど「男鹿半島・大潟ジオパーク」として日本ジオパークに認定された。認定に至る経緯を、秋田大学名誉教授でNPO法人あきた地域資源ネットワーク理事長白石建雄氏（しらいしけんお）と男鹿市教育委員会生涯学習課竹内弘和氏（たけうちひろかず）に聞いた。

「男鹿半島・大潟ジオパークには、日本海の形成を含めた過去7,000万年間の大地の出来事が30km四方の範囲に凝縮しています。美しい景観と多様な地形、活発な火山活動の痕跡、氷河時代の海面昇降と地殻変動、豊かな自然と固有の文化、人間による大地の創造など、誇るべき資源が数多く残されています。それらを多くの人々に紹介し、訪れていた

だく事で、交流人口の増加に結びつ

けるなど、地域の活性化につなげることができないか、と日々考えていました」と白石理事長は言う。



この男鹿半島・大潟ジオパークの特徴的な地質資源を活用するため、白石理事長は、平成20年9月、秋田大学で開催された日本地質学会の市民講演会でジオパーク構想を発表した。ジオパーク認定のためには、様々な条件をクリアしなければならない。地質遺産の保全はもちろん、教育普及、経済開発、運営組織の確立など多岐に渡る。

当初、市民のジオパークに対する認知度は低かった。しかし、男鹿市の活性化を目指す民間団体「男鹿半島まるごと博物館協議



2000万年前の地層観察ポイント「館山崎のグリーンタフ」



3000万年前の火山噴出物でできている「潮瀬崎のゴジラ岩」

会」がジオパークへの取組を開始することにより、事態は大きく進展することとなった。同協議会主催で講演会やジオツアー（現地観察会）などのイベントを地道に行った結果、徐々に市民はジオパークに対する理解を深めていき、さらに行政や各種団体から構成される推進協議会が設立されることになった。

平成22年9月、「NPO法人あきた地域資源ネットワーク」が発足し、活動はさらに加速した。マップ作成や各種イベントを実施することに加え、新たにツアーガイド育成を行った。これは楽しみながらジオパークのことを学ぶことができるガイド育成を目的としており、土日で座学と現地視察の講座を計8回開催した。

一方、男鹿市教育委員会生涯学習課の竹内氏は、男鹿半島・大潟ジオ

50万年前から8万年前までの地層が  
観察できる「安田海岸の大露頭」



寒風山の溶岩が噴出して盛り上がった小山「鬼の隠れ里」



波の浸食作用と土地の隆起による海食洞「カンカネ洞」

パーク推進協議会事務局の中心メン  
バーとなり、インフラ整備と事務局  
の役割を担った。なかでも各ジオサ  
イト（＝観察ポイント）をわかりや  
すく説明するための作業に苦労した。  
「学術用語を、小学校高学年の子ど  
も達が理解できる言葉にしてジオサ  
イトマップを作成することが大変で  
した。協力いただいている先生方と、  
専門用語をわかりやすい言葉に代え  
る議論は禅問答のようでした（笑）」。  
竹内氏は、地質学の知識が無かった

らの見学者向けの設備強化、多言語  
によるパンフレットの作成と誘導標  
柱や説明板の設置。災害対策では、  
避難誘導路の整備や海拔表示地点の  
増加等を強化して可能な限り減災に  
取り組む必要がある。  
ガイド教育も急務だ。小学校高学  
年の子ども達でも理解できる説明が  
可能なガイドを育成して、若年層か  
ら知識レベルの底上げを目指してい  
く。その後、多言語で同レベルの説  
明ができるガイド育成に力を入れて

ため、かえって専門的になら  
ず、誰もが理解できるような  
パンフレット等ができた。  
インフラ整備でも苦労した。  
「ジオサイトに説明板を設置  
するのですが、男鹿半島の海  
岸部のほとんどが国定公園に  
指定されているため、景観を  
損なわず、植生にも配慮して  
説明板を設置するには、いろ  
いろと配慮が必要でした」  
こうした様々な課題を克服  
することにより、ついに、平  
成23年9月5日、男鹿半島・  
大潟地区は日本ジオパークに  
認定された。

今後は世界ジオパーク認定  
に向けてさらに活動を進めて  
いくことになるが、いくつか  
の改善点を日本ジオパーク審  
査員から指摘された。海外か  
ら

いかなばならない。

また、男鹿のナマハゲや赤神社  
五社堂、脇本城跡など文化財と地質  
遺産を組み合わせた魅力的なツアー  
コースの検討や、地場産品を活用し  
た食事・おみやげの開発も必要だ。  
竹内氏は「すぐに結果が出ない課題

## 全 市を挙げて取組む 体験型プログラム「きやんぱく」

鹿児島県薩摩川内市

薩摩川内市では平成20年から「地  
域資源を掘り起こし、磨き上げて、  
まちを「まるごと」売り込む」、いわ  
ゆるシティセールスを推進している。  
これは、薩摩川内の「旅・食・品」を  
通じて知名度の向上、経済活性化、  
誇りと郷土愛の醸成を目的とするも  
ので、市内の企業や団体、個人事業  
者等4,150名からなる「シティセ  
ールスサポーター」が薩摩川内の魅  
力をチラシの配布や口コミ等でPR  
し、ホームページやブログで情報発  
信する。

その中の旅部門の展開が「きやん  
ぱく」（正式名称：薩摩川内スピリ  
ッツ・きやんせ博覧会）と呼ばれる  
もの。この言葉は、薩摩川内の人々  
のおもてなしの心「薩摩川内スピリ  
ッツ」と鹿児島弁の「いらっしやい  
ませ」という「きやんせ」という意  
味を込め、博覧会と合わせた造語。

もあるが、地域で活躍している方々  
の協力を得ながら一つ一つ解決し、  
地域住民が主体的に参画しやすいジ  
オパークを目指していきたい」と熱  
く語った。  
ジオパークによる地域活性化の取  
り組みは始まったばかりだ。

実施主体は市と観光  
協会で作る実行委員  
会で、平成23年春（2  
月11日～5月8日）  
から始まった「春旅」で  
は103の体験型プログ



天体写真撮影体験



薩摩路100kmサイクリング



ラムを造成した。農家、漁家、工商業者から、文化人、各界で名人や達人と呼ばれる人々など83の企業・個人がパートナーとなり「きゃんぱく」の各プログラムを企画した。薩摩川内市の名所旧跡はもちろん、産業・文化・民俗などのあらゆる地域資源と人的資源を動員し「創る・味わう・巡る・動く・癒す」のカテゴリー別に「体験型プログラム」を提起・推進するという、ま



小物入れ、ネック携帯ストラップづくり体験



甕(こしき)で「かのこ」を満喫

さに全市を挙げての取組みであった。具体的には甲冑製作で知られる市内の企業が経営する「川内戦国村」での甲冑着用体験や「せんだい宇宙館」での天体写真撮影体験、「イチゴ農家やぶどう農家での「イチゴ大福作り」や「ぶどうゼリー作り」、ユニークなところでは、肥薩おれんじ鉄道とタイアップした「婚活列車2時間の旅」など。

この背景には、平成23年3月の博多駅から鹿児島中央駅までの九州新幹線の全線開業にともない、関係者

## 路 地裏散策のモデルツアー「ふとみとりっぷ」を開催

千葉県鴨川市

のなかに「観光客が薩摩川内市にある川内駅をスキップしてしまうのでは」という危機感があった。それゆえ、可能な限りの「プログラム」を提起して、まずは市民に、そして県民、県外のお客様に知ってもらおうというもの。この事業の「キモ」となったのが前述のサポーター。多くのプログラムに参加し「きゃんぱく」の良さを情報発信した。平成23年は「春旅」のほかに「夏旅（7月30日〜8

月30日）26プログラム」と「秋旅（10月7日〜11月30日）61プログラム」も実施され、3つ合わせてのホームページビューは約54万件、参加者総数は6,739人。まずは上々の滑り出しといえよう。平成24年「春旅」も実施予定で、2月11日〜3月18日の間に約30のプログラムが用意される。お問い合わせは「きゃんぱく」総合予約センター（☎0996・23・9889。http://www.canpak.jp）へ。

商店街の食べ歩きや農漁村の集落を歩き「小さな発見」を楽しむというTV番組の人気の影響なのか、いわゆる「路地裏ツアー」が盛んだ。小集団で、地元ガイドの説明に従ってぶらぶらと町歩きをして、それぞれの土地で「美味しいもの」を味わい、「面白いもの」を探するという「オルタナティブ・ツアー」のひとつでもある。

派遣して、同協会が取組む「着地型旅行商品」の開発に対し指導・助言を行っている。その取組のひとつとして10月23日（日）、観光協会の主催で市の南部にある太海地区のモデルツアーを実施した。



「専門家派遣事業」の一環として、千葉県鴨川市の（社）鴨川市観光協会に浅尾均氏（旬浅尾計画事務所代表）を



漁村の路地裏を巡る



鯨節加工工場を見学



昼食は新鮮な海の幸を使ったバイヤベース

「ふとみとりつぷ」と銘打たれ、地区内の旅館経営者などの地元有志でつくる「波太マニア」の案内によるこのツアーは、風光明媚な静かな漁村を散策し、



路地の中にある鮮魚店で干物を味わう

地元で獲れた魚介類をフレンチ風に料理したランチを楽しむというもの。市民を中心に約20名が参加した。料金は2,500円。午前10時にJR太海駅に集合し、ガイドの案内で、集落の信仰を集める「いぼ神様」や紀州や四国の人々が伝えたという鯉節の加工場などを見学し、地元有志が作った「路地マップ」を見ながらの自由散策。その後昼食場所のペンションに集合してサザエのブルゴニユ風バター仕立て、イセエビ・ハマグリ・クロダイのバイヤベースなどの海鮮料理を楽しむものとなった。

門家派遣事業」を活用して、専門家のアドバイスを受けながらフィールドワークを行い、今回のモデルツアーを実施するに至った。

## 美 浜町の「へしこちゃん」が町のPRに大活躍

全国各地でマスコットキャラクター作りが大流行だ。

なかでも、そのかわいらしさが大人気となった滋賀県彦根市の「ひこにゃん」に代表される

「着ぐるみ」を使っていたいわゆる「ゆるキャラ」は社会現象にもなっている。

「ゆるキャラ」とは雑誌「SPA!」誌上で評論家のみうらじゅん氏が命名したもので、見た人に「何だ、あのフォルムは!？」と思わせて地域の特産物や名所など伝える」のが使命なのだそう。

福井県美浜町の「へしこちゃん」も、そんな「ゆるキャラ」のひとつ。

平成21年には「SPA!」の「ゆるキャラアワード2009」のグランプリに輝いた。受賞理由は「カワイイで終わることなく、樽から飛び出す魚という無理な設定で、これ何!？」

がちなバーベキューや刺身といったものではなく新鮮な地元素材を使った上質な料理（鴨川グランドホテル監修）であったことから、これも参加者を驚かしたようだ。今回は平成24年2月に開催する予定。

お問い合わせは(社)鴨川市観光協会 (☎04-7092-0086)へ。

お問い合せは(社)鴨川市観光協会 (☎04-7092-0086)へ。

お問い合せは(社)鴨川市観光協会 (☎04-7092-0086)へ。

お問い合せは(社)鴨川市観光協会 (☎04-7092-0086)へ。

お問い合せは(社)鴨川市観光協会 (☎04-7092-0086)へ。

福井県美浜町



「へしこちゃん」



と思わせる」というもの。平成21年時点のみうら氏が確認した約300体超の中から選ばれた。

「美浜のへしこ」は新鮮な鯖などを塩漬けにし、いったん取り出だして糠に漬け、本漬けにしてから1〜2年熟成させたもの。「農林水産省の郷土料理100選」にも選ばれ、各種ミネラルとアミノ酸のバランスの良い健康食品としても注目されている。

その「へしこちゃん」は、平成17年に観光協会と町が進めていた「へしこ」を活用したまちおこし事業の

PR強化の一環として作られた。民間の制作会社が提出したイメージに商工観光課主査の伊達美鈴さんを中心としたメンバーが手を加えて作り上げたものだ。同時に「へしこドーナツ」という曲まで作った。

今では全国各地に年間30回以上出かけて、「へしこの町・美浜町」のPRに努めている。「ゆるキャラアワード2009」のグランプリに輝いたことで、「美浜野へしこ」という本名と住所、家族構成などが記された「特別住民票」が交付され、ぬいぐるみやストラップなどのキャラクターグッズも町内の観光施設や旅館・民宿で売られており、順調な売上げとなっている。

平成23年10月には美浜南小学校の児童が修学旅行で京都を訪れた際、新京極商店街で「へしこちゃん」の着ぐるみをかぶり、取組んできた「古里学習」の成果や美浜町の産品を紹介した。観光イベントに限らず「へしこちゃん」はあらゆる場面で美浜町のPRに大活躍している。

特別住民票も交付されており本名は「美浜野へしこ」



特別住民票も交付されており本名は「美浜野へしこ」



桜のトンネルは県内有数の名所の可能性



「桜まつり」の様子

# 春を待つ「桜坂」

松島は、歌手の福山雅治氏が就職をして初めて発電所点検の仕事で訪れた場所としても知られており、江戸時代は捕鯨、大正から昭和初期までは炭鉱が島の賑わいを支えた。

その島で、平成24年で3回目を迎える「西海市松島桜坂まつり」は、長崎県西海市大瀬戸町松島にある電源開発(株)松島火力発電所社宅に登るなだらかな坂道に植栽されている約200本の桜が咲く3月下旬に開催されるイベントで、主催は松島桜坂まつり実行委員会(<http://madamn.exblog.jp/>)。期間中は桜坂のライトアップが行われ幻想的な風景が

## 長崎県西海市



展開される。また、期間中は全周9kmの島内バス観光やステーションイベントも行われる。

このイベントは、島おこし・地域おこしを主眼に地域活性化のために始めたものであり、高齢化に伴い減少傾向にある島の人口を少しでも食い止めるため、桜坂まつりをきつ

けに交流人口の増加、ひいては定住人口の増加に少しでもつなげたいとの思いを、松島桜坂まつり実行委員会松田一明委員長は熱く語った。

桜坂をイベントの中核に据えたねらいとしては、坂道に植わる桜並木が開花の頃には見事な桜のトンネル(写真参照)となることから、長崎県内でも有数の桜の名所となるとの思いがある。

平成22年の第1回の時は10日間開催して延べ3,100人の観光客が訪れ、平成23年の第2回では開催期間は1週間だったものの2,000人が

訪れたという。

お盆の時期や桜坂まつりの時期には、松島港に船で到着した人を最初に出迎える、桟橋から約60m沖合いに浮かぶ小さな「らくだ島」もライトアップされ、観光客を出迎える。なお、島内観光はまつりの期間外でも実施しており、前もって連絡を頂ければガイドによる案内も可能とのことである。

お問い合わせはNPO法人西海市観光協会(☎0959・37・5833)または西海市商工観光課(☎0959・37・0071)へ。

# 復興願う「義捐芋」を被災地に送る

## 愛媛県伊方町

愛媛県伊方町の名産といえば、みかんだけではない。日本一細長い佐田岬半島は、「栗より甘い十三里」と言われるサツマイモ「瀬戸金太郎芋」の産地としても知られており、南国の日差しと潮風を受け、水はけの良い傾斜地では、糖度の高い良質のサツマイモが栽培されている。

このサツマイモを東日本大震災の被災地に届けようと、町内に「ガラソン山義捐いもプロジェクト」が立ち上げられた。これは町内の有志や町、県の職員等で構成され、伊方町地域振興センターが支援するもので、伊

方町の施設である「伽藍山体験農園」の約20アールを無償で借り受け、5月に苗を植え付けて、この度約3トンを収穫した。

10月24日には、プロジェクトに賛同した町立三崎中学校の全校生徒が、この「義捐いも」を収穫し、かねてから交流がある宮城県気仙沼市の大谷中学校や周辺の仮設住宅にも届けられた。この他、宮城県石巻市の復興イベントや福島県大熊町の小学校



町立三崎中学校の生徒による芋掘り

にも送られている。また、一部の芋を販売して送料にあてていたところ、十分な売上げがあった。その収益で、スタッフのみかんを持ち寄り、これも福島県いわき市の中学校や東北電力の女川原子力発電所などへ送られた。